

研究課題：要介護高齢者の口腔機能と全身状態の関連に関する研究

研究者名：角 保徳¹⁾、梅村長生²⁾

所 属：¹⁾ 国立長寿医療センター病院先端医療部口腔機能再建科、²⁾ 愛知三の丸病院歯科口腔外科

【目的】

介護予防に口腔機能向上が導入された背景の下、本研究では口腔機能と全身状態の関連を調査するために特別養護老人ホーム入所者に以下のデータを採取し統計学的に評価した。

【対象】

対象者は、本研究の趣旨を十分に理解し、本人または家族の同意が得られた、愛知県内の特別養護老人ホーム入所者 79 名（平均年齢 82.2±8.5 才、男性 25 名、女性 54 名）である。

【方法】

口腔機能評価の指標として、

- ①うがい機能：うがいテストを用いた。
- ②水飲みテスト：改訂水飲みテストを用いて評価を行った。

全身状態評価の指標として、

- ① 認知機能の評価：精神科専門医による MMSE を用いた。
- ② ADL の評価： Barthel Index を用い評価した。
- ③栄養状態の評価：対象者に対し栄養状態を反映する指標として考えられる、血清アルブミン値および BMI (Body Mass Index) を評価した。

統計ソフトは SPSS を用い、相関関係 (Spearman 順位相関係数) や 2 群間の有意差 (Mann-Whitney の U 検定、Student の T 検定) の有無を統計的に評価し、要介護高齢者において口腔機能と認知機能、ADL、栄養状態との相関関係や関連性を検討した。

倫理面への配慮

国立長寿医療センターの倫理規定を遵守した。各試行において、目的、方法、手順、起こりうる危険についての説明を口頭もしくは文章で提示し、承諾書により被検者の同意を得るなど、インフォームド・コンセントに基づき倫理面への十分な配慮を行う。上記研究は、国立長寿医療センターの倫理委員会の承認を得ている。

【結果】

水飲みテストおよびうがい機能テスト値は、認知機能 (MMSE) および ADL (Barthel Index) は、強い相関が認められた。水飲みテストおよびうがい機能テスト値は、BMI とは有意の相関を認めた。水飲みテストの値は、血清アルブミン値と有意の相関を認めたが、うがい機能テスト値は血清アルブミン値とは相関を認めなかった。

【考察】

本研究の結果、口腔機能は認知機能、ADL および栄養状態をはじめとする全身の機能と極めて密接に関係することが判明した。今後、高齢者が新たに要介護状態となることや要介護度の重度化を予防する観点から、口腔機能低下の予防対策に取り組む必要性がより明確となった。得られた成果を今後の 8020 運動および歯科口腔保健活動に役立て、高齢者の積極的な健康づくりに寄与したいと考える。